

# 大和川「亀の瀬」に潜むふたつのリスク

## 大阪湾に流れる最後の関門

県内156本の川を一手に集める大和川。大阪に向かう唯一の水の出口を「亀の瀬」と呼ぶ。大和川を挟んで北側に生駒山地、南側に金剛山地があり、ふたつの山地が大和川に向かいせり出していて、大和川の川幅が一気に狭くなる地域だ。(写真参照)

この地域は過去に何度も地すべりを起こしていること。実は亀の瀬にはこのふたつのリスクが潜んでいる。国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所がそれぞれ対策を施す。

### ここにある危機

## バックウオーター

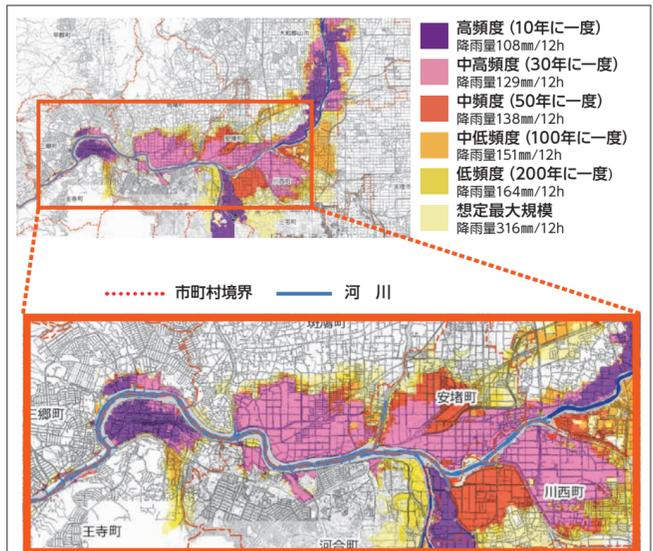
奈良盆地から大阪湾に流れ込む唯一の川が大和川。このことを知らない県民が案外多いという。

県内で目立って大きな川が大和川だが、この川に156本の川(大和川の支川)が流れ込んでいる。なかには複数の川が合流し大和川に流れ込んでいる地域もあり、こうした地域は特に氾濫の危険が高い。ひとたび大雨

となれば、狭窄部となっている亀の瀬に水が集中する。川幅が狭いため、下流側に流れる力が弱い。そのため上流

情報が提供し、意識喚起を行っている。

部の奈良側の水位が高くなる。これを「バックウオーター現象」と呼ぶ。バックウオーターは、大和川に流れ込む支川にも現れる。昭和57年8月、亀の瀬に近い葛下川(かつげがわ・王寺町)現象により王寺駅前などが氾濫被害に遭った。



大和川河川事務所では洪水リスクマップを公開する。100年に一度程度の大雨が降った場合の浸水リスクを顕した。その地域の過去の水害から今後の洪水レベルを分析している。

大和川河川事務所が公表したハザードマップとは異なる。これを「バックウオーター現象」と呼ぶ。

大和川を管理する大和川河川事務所は現在、大和川の川底を掘る工事を進め、県や周辺自治体などは一時的に増水した川の水を貯める貯水池の整備などを行い、行政が協力して治水対策を進めている。10年に一度程度の大雨で、浸水被害が想定される「リスクマップ」も公表、住民にも水害リスクを認識してもらっている。



大和川の川幅が狭くなる地域・亀の瀬。奈良から大阪へ流れ出る唯一の河川が大和川だが、亀の瀬の狭窄部に大雨などで過度に水が流れ込むと奈良側の水位が高くなる「バックウオーター」を引き起こす。また、地すべり地帯でもあり、かつては大和川をせき止めたこともあった。



県内の河川が大和川に流れ込むを示す概略図。徒歩や自転車などで川沿いを進むと、大和川に向かって水が流れていることが実感できる。

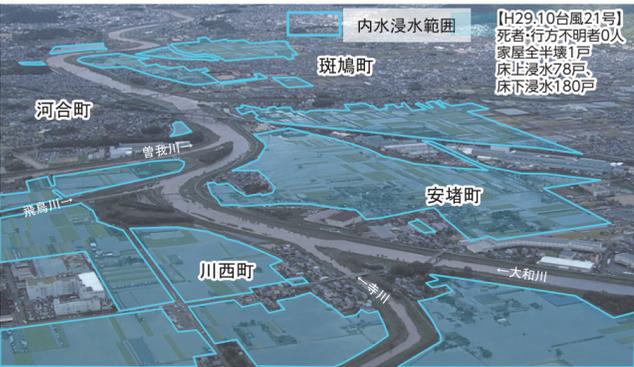
## 地すべり

### 危機からの脱出

亀の瀬は太古の昔から地すべりを起こしている。記録がはっきり残っているだけでも明治36年、昭和6年から7年、また昭和42年にも起きている。そのため当時の建設省が約60年前から本格的な対策工事を行い、現在は「地すべり」のリスクはほぼ解消されている。地すべりとは斜面を構成している土地の一部が、おもに地下水の影響により、ある程度原形を保ったまま、ゆっくりと斜面下方に移動する現象のこと。土砂崩れは表面的な崩壊だが、地すべりは一定の層がまとまって動く。数日・数週間にはわたってゆっくりと地すべりを起こすこともある。

現在、主な対策工事を完了させたが、いまま一部地域では継続して工事を行う。

### 中流域の被害



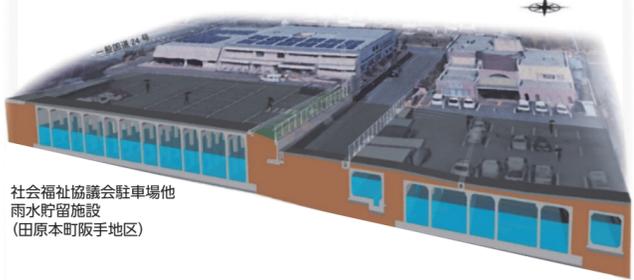
大和川に流れ込む複数の支川が流れ込む地域も県内には存在する。川が流れ込むということは土地が低いということであり、その分、浸水リスクが高まる。

### 過去の被害



昭和57年8月「57水害」は王寺駅中心部が水没。亀の瀬の近い王寺町を流れる葛下川にバックウオーター現象が起き河川が氾濫したことが原因だった。死者・行方不明者は0人だったものの、家屋全半壊256戸の被害を出した。対策工事が進み、現在は当時と比べて氾濫リスクは低減しているものの、リスクが完全に除去されたわけではない。

### 県や周辺自治体と協力「貯留施設」



昭和7年に起きた地すべりは当時大和川右岸(北側)にあった亀の瀬隧道(現在のJR大和路線)を飲み込み、大和川をせきとめて



